

偽膜性大腸炎とは

偽膜性大腸炎とは、内視鏡検査で大腸の壁に小さい円形の膜（偽膜 ぎまく）が見られる病態で、そのほとんどがクロストリジウム・ディフィシル菌（*Clostridium difficile*）による感染性大腸炎の1種です。



クロストリジウム・ディフィシル菌（C
D）の産生する毒素により、粘膜が傷害さ
れて起こります。



主な症状は下痢であり、抗生物質などの服用1～2週後に「1日2～3回（いつもより回数が多い）のやわらかい便」、「頻ぱんに水のような下痢がおきる」、「粘性のある便」、「お腹が張る」、「腹痛」、「発熱」、「吐き気」などが多くの症例で認められます。



偽膜性大腸炎が生じた場合、気づかずに放置すると重症化する場合があります。

高齢者や腎不全、がん、白血病などの重篤な基礎疾患をもつ方で発症が多いとされていますので、特に注意が必要です。



-----補 足-----

健康な人の大腸内には、様々な腸内細菌がバランスを保って生息していて健康維持に役立っていますが、抗生物質の服用により、正常な腸内細菌のバランスがくずれてある種の菌が異常に増え（菌交代現象）、大腸に炎症（感染性大腸炎）を起こすことがあります。

偽膜性大腸炎とは、クロストリジウム・ディフィシル菌（*Clostridium difficile*）による菌交代現象の1種です。